
短編小説集

すけなが

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短編小説集

【Nコード】

N6205U

【作者名】

すけなが

【あらすじ】

「なんだか、こんなことってあるよね」日常に転がっていきそうな不思議を、短編小説にしてまとめてみました。

みずいろの黄身

「お伝えします。」

きのう、東京都板橋区の民家において、二十代後半と思われる女性が発見された事件ですが、きょう未明、女性の夫が同市内の交番に出頭してきました。

被疑者で夫のKは、警察の聴取に対し『三か月ほど前に、一年間の海外赴任から帰宅した。出迎えた妻を見て驚いた。目がふたえになり、鼻は高くなっていた。この三か月は、なんだか他人と暮らしているみたいで息が詰まった。おとこの深夜、妻の寝顔を見てると急に恐ろしくなり、気がつく濡れタオルで妻の顔を押しさえていた』と、犯行を認める供述を始めているそうです。

朝早くのテレビ。元気いっぱいのアナウンサーが、暗いニュースをすらすらと伝え終えた。僕はネクタイを結びながら、テレビに向かって咳く。

「はーあ、ちょっと顔をいじったくらいで殺すかね。ちっちゃい男だな」

テーブルの上の鏡を見ると、強情そうな鼻毛が一本。完全な間抜け面だ。僕は顔を歪めながら、腹立たしくそれを引っ掻く。

「さて、時刻は六時十五分になりました。ここで珍しい話題をひとつご紹介します」

ズボンをはきながらテレビ画面を見ていると、養鶏農家のダイニングらしき風景が映し出された。食卓には確かに珍しく、しかも魅力的な光景が広がっていた。いずれの皿の上にも、黄身が三つある目玉焼き。

「聞いてください。実はこれ、ひとつの卵から出てきたんですよ。すくすく」

まるで自分が生み出したみたいに、女性リポーターは喜んだ。うん、うん。卵の黄身に目がない僕には、彼女の大きな喜びが十分に

伝わってくる。思わず喉がごくりと鳴った。

出勤するなり、部長の大目玉を食らった。いつものことだ。部長のほうにも、特に理由はない。会社という組織には常に怒られ役が必要なのだ。その証拠に、僕はかなり頻度で部長から飲み誘われる。「いつも済まんな」僕は「いいえ。あまり気にしないでください。もう慣れっこですから」と答える。

午前中は、昼食のことで頭が一杯だった。焼きもの？ とじもの？ それともナマで？ 少しも仕事がかどらない。卵のことが気になって仕方がないのだ。そんな悩ましげな僕を心配したのか、課の優しい先輩が「昼飯、一緒にどうだ。うまいそば屋があるんだ」と声を掛けてきた。

そば屋は繁盛していた。つゆと油の香ばしい匂い。先輩は山菜そば定食、僕は月見うどん定食を頼んだ。間もなく、威勢のいい女将がやってきて、僕たちの目の前に、どん、と定食の盆をふたつ置いた。

……………。

月見うどんのどんぶりを、僕は声もなく見つめた。目の前にある信じがたい光景。向かい合って座る先輩は山菜そばを啜りつつ、「今朝のことは気にするな。俺も昔、部長からはさんざん怒鳴られた。まあ、とにかく食えよ。食えば自然と元気も出てくる」と優しい声を掛けてくる。

「いや、そ、そうじゃなくて
うどんの上の卵を箸で示す。

「ん？ 虫でもいたか。それとも、注文でも間違ったか」
「いえ」と小さく首を振って、僕は恐る恐るどんぶりの脇からうどんを一本、箸でつまみあげる。卵を避けるように。

「せ、先輩。突然変なことを聞くようで申し訳ないんですが……」
「なんだ？ 急に改まって」

「そ、その……。たとえば、あそこの壁」

僕はそば屋の壁を指差す。

「あそこにある絵もそうですけど、ヒマワリの花って、たいてい黄色ですよね？」

「そうだな。たいていな」

「それじゃあ、タンポポも？」

「当たり前だ。ピンクじゃおかしいだろ。お前、熱でもあるのか？」

「いえ、大丈夫です。しつこいようですが、最後にもうひとつだけ……」

少し勇気が必要だった。鼓動が激しくなる。

「卵の黄身は、どうですか？」

「おいおい。よく見るよ。お前の目の前にある。いつも言ってるじゃないか。心配なら周りを確認しろよ」

僕は本当に周りを見渡した。どの月見うどんも、僕の目の前にあるものと同じだった。

そんな僕を見て、先輩はもう本当にあきれ返ってしまい、無心でそばを啜り始める。

僕はもう一度、自分の月見うどんを見る。先輩には黄色に見えている卵の黄身が、僕には みずいろ に見えていた。

僕は先輩の助言に従い、会社を早退した。アパートへ戻るなり、冷蔵庫を開いた。卵が三つある。お碗にすべてを割ったが、三つともみずいろだ。

焼いてみた。煮てみた。茹でてみた。でも、ダメだった。仕上がりはすべてみずいろになる。信号機の真ん中や八百屋の店先にあるバナナは確かに黄色だった。どうやら卵の黄身だけが、みずいろに変化するようだ。

「まあ、しばらくはこのまま様子を見るしかない。味は変わらないんだし。ひと晩寝れば、治ってるかもしれない」

だが、この考えがいかに安易であったか、僕は後に思い知ることになる。

卵の黄身がみずいろになってからひと月。もう欠勤が三日も続いている。とうとう会社からの連絡もなくなった。

初めの一週間くらいは我慢できた。でも、みずいろの卵はだんだんとはあるが確実に、僕にダメージを与えていった。すべては色のせいだ。舌に絡む濃厚さは粘つきに、ふっくらしつとりはふにやふにやべちゃべちゃに。そんなふうにしか感じられなくなってしまった。あの卵特有の旨味は、いったいどこへ行ってしまったのだろう。

もちろん、自分なりにできることも試してみた。街のスーパーをランダムに選び、産地も別々になるように工夫しながら、卵を買った。卵料理を出す店もなるべくハシゴするようにした。そうすることで、ちゃんとした黄身の卵に出会う確率が高くなる。そんな気がしたからだ。でも、結果はさんざんだった。

居ても立ってもいられなくなって、ついには医者診察も受けた。でも、目にも脳にも異常は認められなかった。

そうして、僕は卵を憎み始めた。できれば、この世からすべて消し去ってしまいたい。「僕に本当の卵を返せ」そんな気分だ。

だからいま、僕はハンマーを片手に、とあるスーパーの前に立っている。ここから僕だけの闘いが始められるのだ。

「お前、なんであんなことしたんだ。そろそろ教えてくれないんじゃないか？」

黙り続ける僕に、警察官は辛抱強く語り続ける。もう一時間以上もこんな調子だ。だからといって、本当のことを言っても、無駄だろう。僕の苦しみなんで、誰も理解できないに決まっている。「卵の黄身がみずいろで、それがひと月も続いて、精神的にまいっていったんです」そう正直に言えば、自分が今後どうなるかなんで、簡単にイメージできる。

「ずっと黙っているつもりなら、しばらくここにいてもらうしかないな」

留置場のひんやりした床に座りながら、僕はひと月前に起きた事件のことを思い出す。そして今ならわかる。あの男の気持ちが。顔をいじった妻を殺した時の気持ちが。

人には、自分だけにしかわからない、大切なものがある。他人から理解されないこともしばしばだ。

僕にとっては、たまたまそれが、卵の黄身だっただけのことだ。

ガムとアルペン踊り

i podがない……。

健太は思わず舌打ちをした。

鞆を何度探しても、ないものはない。どうやら会社に忘れてしまったようだ。

六本木駅に停車中の地下鉄日比谷線は、北千住行き最終電車。もうiPodを取りに戻る時間はない。しかもきょうは金曜日。普段より声高の酔っ払い客が大勢いる。

北千住まで35分。悪い予感がする。

地下鉄はつつがなく発車した。いつもなら、お気に入りのシンガーが耳元で歌い出すところだ。周りの雑音をかき消すように。

「ねえ、飲み足りなくない？ 朝までいこうよ」

「課長つて、マジ殺したくなんねえ？」

周囲の会話が寒い。気になってしかたがない。でもこんなのは序の口だ。あれさえ来なきゃ、ノープロブレム。

不安を打ち消すため、健太は心で呟いた。

駅を3つ通り過ぎた。車両の一番端。優先席の目の前に立つ健太は、電車が駅に停車するたびに窓の向こうを見つめた。

よし、いまのところガムを噛んでるやつは見かけない。

電車はまもなく銀座駅に停車する。第一の難関。健太は祈るように、つり革を両手で強く握り締める。

けれども、奇跡は続かなかった。

40代半ばくらいの無精ヒゲをはやした男が窓越しに見えた。リズムカルに動かされる頬。あきらかに酔っている。ドアが開き、降りる客と乗る客が、押し合いへし合いして、入れ替わった。

5秒後。

「クツチャ、クツチャ、クツチャ、クツチャ、クツチャ」

耳元で鳴らされるチューインガムの音。

とうとう来ちゃったか

健太はそーっと右隣を見る。さっきの無精ヒゲ男だった。男は目を閉じたまま、つり革につかまっている。立っでいられるのが不思議なくらい、足元がおぼつかない。

半分寝てるみたいなのに、どうしてきちんとガムが噛めるんだ？

「クツチャ、クツチャ、クツチャ、クツチャ、クツチャ」

この男は、いったいどこまで……。

北千住駅まではまだ10駅以上ある。

健太は暗澹たる気分になった。黒板に爪、ガラスに釘。ぜんぜん平気だ。ただ、耳元でガムを噛まれる音だけは、どうしても我慢できない。こんなときにかぎって、頼みの綱になるipodは手元にない。

耐えるしかなかった。

注意なら、これまでに二度ほどしてみたことがある。一度目は女で警察に通報されそうになったし、二度目は男にキレられ胸倉をつかまれた。

試したことはないが、おそらく、周りの乗客にこの気持ちを訴えても無駄だろう。

「だってガムですよ」

と返されれば「そうですね」というほかない。健太は左を向いて、無精ヒゲの男に後頭部を向け続けた。それでも、両耳は確実にガムを噛む音をひろう。まるで集音マイクのように。左隣は、車両の行き止まり。他の乗客はいない。それが、せめてもの救いだ。

「クツチャ、クツチャ、クツチャ、クツチャ、クツチャ」

「クツチャ、クツチャ、クツチャ、クツチャ、クツチャ」

2人になった。

銀座から7つ目の秋葉原駅。へべれけ女が乗り込んで来て、健太の左隣に体を押し込んできた。電車が発車すると、右隣の無精ヒゲ男とまったく同じポーズをとる。

ガム音のステレオ。完全に挟まれた。

神様、本当にいるのなら聞いてください。この世からガムを、この世からガムを……。

「次は上野、次は上野。常磐線にお乗換えのお客様は、お急ぎください」

無精ヒゲ男とへべれけ女の？ガムペア？が目覚めます。

声が天に届いたのか。車掌！ もう一回！ もっと大きな声で！

電車の扉が開き、乗客がなだれのように降りていく。健太の胸はときめいた。

扉は閉められた。

やはり希望などもってはいけなかった。

ガムペアは上野の駅名を見届けると、ふたたび目を閉じた。

「クツチャ、クツチャ、クツチャ、クツチャ」

ワンコーラス遅れて、

「クツチャ、クツチャ、クツチャ、クツチャ」

もう！ 我慢できない。俺をおちよくってんのか。

我慢を重ねれば重ねるほど、イライラが増幅していく。健太は両の拳をあらん限りの力で、強く固く握り締めた。

そのときだった。

あれ？ これ？ なんだ？

健太の頭の中に、なぜか懐かしいリズム。

右隣から無精ヒゲ男のガム音。

「クツチャ　クツチャ　クツチャ　クツチャ　クツチャ」

健太の頭の中で……。

アッル プッス イチマン ジャック
ワンコーラス遅れて、左隣からへべれけ女。

「アッル プッス イチマン ジャック」
同時に、無精ヒゲ男。

「コッ ヤツリノ ウ〜 エッデ」
続いて、へべれけ女も……。

健太は目をつむって、耳を澄ます。頭の中で、アルプス一万尺の完璧なるカノン。

あれは、小学校低学年の音楽の時間。たしかクラス全員で輪唱を……。

まぶたの裏に、懐かしい顔が浮かぶ。

あるとき俺、みんなの前で指揮者をやってた。そうだ！目の前には初恋の……う〜ん、なんて名前だっけ？

「アールペーン オドリヲ サアオドリツマシヨ」

そ、そうだ！ アカネちゃんだ。可愛かったな〜。とくに、最後にヘイツ！ って言う時の顔。

「ラ〜ンラ ランラン ランランランラン」

「ラ〜ンラ ランラン ランランランラン」

「まもなく北千住〜。北千住〜」

だっ、黙れ車掌！ いま、いいところなんだよ。うるさくって聞こえない。

「ラ〜ンラ ランラン ランランランラン」

「ランランランランラン」

そうそう。この後。この後。みんなでいっしょに〜〜〜。

「ハイ！」

健太は拳を突き上げる。

と同時に、体が大きく左右に揺れた。健太はゆっくりと目を開ける。自分の周りから、乗客がそつと離れていくところだった。

最終電車は終点の北千住駅に停まった。

「北千住〜。北千住〜。降り口は右側です。なお、この電車は回送

電車に……」

急ぎ足で電車を降りていく乗客の中にあつて、左右のガムペアはまだガムを噛み続けている。相変わらず癪に障る音だ。でも、健太はそれを、いまはなんだか許せそうな心持ちになっていた。

500円玉、1000枚で。

「明日も、またあそこから日が昇るのか」

男は漆黒に染まる夜の海を眺めながら、ひとつ大きなため息をついた。

友人の連帯保証に要した金は、男から多くのものを奪い去った。家族、仕事……。数え上げればきりが無い。逆に男に残されたものは、ズボン、シャツ、皮のベルト、下着、靴、たった今空になったウイスキーのボトルが1本。もう、明日への希望など持つべきではないのかもしれない。男は思った。

そしてようやくではあるが、ある結論に達しようとしていた。折りよく、いま、周りに人気はない。

「死のう」

男はできるだけ頑丈そうな松の枝を選び、皮のベルトを引っ掛け

た。

「青年。もうお迎えか」

男は暗闇からの声にぎよっとした。松の根元に老人が座っている。「なんだ、じいさん。びつくりさせるなよ」

「驚いたのは、こつちだ。それよりお前さん、本気で死ぬつもりか。今まさに死のうと思っていたのに、男はなぜか、すぐに返事ができなかつた。」

「人間迷っているうちはまだ大丈夫だ。どうだ、少しだけ話をしな

いか」

老人の隣に男はしゃがみ込んだ。老人はひと苦勞といった感じで、小ぶりなりユックから、ビニール袋を取り出す。

「ここに五百円玉が千枚ある。これをお前さんに預ける。ただし、それには条件がある。話の続きを聞く気があるか。それとも……」

老人が松の枝を見上げる。男は迷った。このやり口には覚えがある。条件を提示する前に、おいしい話を持ちかける。かつて銀行マ

ンだった自分もたびたび使った手法だ。

男の迷いを察したのか、老人は上着のポケットから小切手を取り出す。男は思わず目を見開いた。5の次に0が七つ並んでいる。

「確認したか？」

男はごくりと唾を飲み込んだ。

「今から私が、お前さんにある質問をする。答えられれば、この五千万円はお前さんのものだ。おそらく、こいつで人生のやり直しもできるだろう。さあ、心は決まったか」

どうせ一度は捨てかけた命だ。もう失う物もない。男はしっかりとわずいた。

「簡単な質問だ。この五百円玉千枚を使って、人を最も幸せにする方法と人を最も不幸にする方法を考えてくれ。私は明後日の夜にまたここに来る。その時までには答えを用意してほしい。その答えに私が満足すれば、この小切手を渡そう」

男はある疑念を抱き、当然の質問をした。

「それでじいさんに何の得がある。もし、答えられなかったら、俺はどうなる」

老人は闇夜に響き渡る声で笑った。

「まさかこの私が『代償はお前さんの命だ』なんて言うとも思っただかね。私が望んでいるのは、あくまで答えだ。それ以外はどうでもいい……が」

老人はまた上着のポケットに手を突っ込むと、きらりと光る何かを取り出した。

「手を出して」

男は右手をそつと差し出した。瞬間、手のひらに鋭い痛みが走る。「いまのは毒だ。私は先の大戦中、毒物を研究する機関に所属していた。きちんと解毒しないと、人の頭は3日後に破裂する。もちろん、お前さんの答えを聞いたら解毒する。だから、決して逃げ出したりするんじゃない」

老人は去った。男は呆然と暗闇を見つめた。残されたビニール袋

を持ち上げる。ずしりとした感触が腕に伝わる。『まだ生きている』男はそう思った。

男がまずしたことは、自分に少しの幸せを贈ることだった。ビール袋の金で、煙草とパンとビールを買った。男はビールを飲みながら、老人からの質問について考えた。

まず五百円玉についての知識を再確認する。重量七g、直径二六・五ミリ、厚さ一・八五ミリ、材質は……たしか主に銅。しかし、これぞという考えはひとつも浮かばない。何かの重石に使うとか、窓ガラスに向かって投げるとか、つまらないことばかり思いつく。

金額の威力についても考えた。善意の贈り物をしたところで、細々とした暮らしが半年間続けられるかどうかだ。かといって、誰かの生活を合法的に破壊するほどの力もない。

これではいけない。
なにせ求められているのは、人を最も幸せにし、最も不幸にする方法なのだ。

男は途方に暮れた。

そもそも、金って何だ？ 人って何だ？

考えれば考えるほど、最上の答えから遠ざかるような気がした。

約束の日の夕方になっても、目の前にいいアイデアは浮かんでこなかった。いっそのこと、あの海にでも投げ込んでやろうか。

男は立ち上がりながら、ビール袋を持ち上げた。二日ぶりの重さが腕に伝わる。腕を思い切りスイングしかけたとき、頭の中で何かひらめいた。

慌てて腕を止めた男は、ビール袋の中身を凝視した。男の目に映る五百円玉は、金である前に、たしかに金属であった。

老人は約束どおりに現れた。

「それでは。答えを聞こうか」

男が自信ありげにうなずく。

「答えはどつちも同じだ。俺ならこの五百円玉千枚を使って人を撲殺する。死にたいと思うやつには最上の幸せを、まだ生きていたいと思うやつには最悪の不幸をくれてやる」

男の答えを聞いて、老人は深くうなずいた。

「満足だ。手を出せ」

男は半信半疑で手を出した。手に五千万円の小切手が置かれる。しかし、油断はできなかった。問題はまだ残っている。

「じいさん。小切手はたしかに受け取った。早く解毒してほしい。でないと、こんな小切手なんてただの紙切れだ」

「まあ、そう慌てるな。毒消しは別の場所にある。あとはそれを取りに戻るだけだ。お前さんとは、これで本当にお別れだな。どうだ、老いぼれの頼みと思つて、最後にひとつだけ質問させてくれんか」

男はしぶしぶ、それを承諾した。

「まずは、その五百円玉の入ったビニール袋を私とお前さんの真ん中に置いてくれ」

男は老人に言われたとおり、ビニール袋を自分と老人の真ん中に置いた。この土壇場で相手の機嫌を損ねては元も子もない。

「ありがとう。本当にうれしいよ」

老人は懐かしそうな目でその袋を見つめたあと、男に向かって言った。

「さて、これで最後の質問だ。この五百円玉千枚で、今お前が最も殺したい相手は誰だ。つまり、私か……それとも」

老人は自分を指差したあと、その指をゆつくりと男に向けた。それから、その手をスーツの内ポケットに差し入れ、ナイフを取り出すと、自らの首に近づけた。

男はこのときはつきりと理解した。自分はつくづく騙されやすい人間なのだ。そしてもう二度と人に騙されることはないのだと。

男は人生の最期に、この老人に最大の幸せを贈ることにした。しかと目に焼き付けてほしかった。総重量七キログラム。コインの塊を天に向かって振り上げると、力の限り自分の頭に振り下ろした。

老人はもうぴくりともしなくなった男に向かって、囁きかけた。
「私は結局、人の頭が破裂する毒薬を作れなかった。でも、お前さんのおかげで、ようやくその夢が叶ったような気がする。私はいま、本当に幸せだよ」

それから老人は、実に実にゆっくりと、松の枝にロープをくくり始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6205u/>

短編小説集

2011年7月24日03時16分発行